

先天性視覚障害児の空間表現語理解に関する研究 —位置関係の表現における空間参照枠の活用を中心に—

丹所 忍(兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 特別支援教育専攻 講師)

I 研究の目的

先天性視覚障害児の言語発達は、晴眼児と比べて初語の発現が遅れることをはじめ、低い段階に留まる場合がある(五十嵐, 1995)。また、先天性視覚障害児は空間情報の入手や空間概念の形成に困難を伴う。先天性視覚障害の者が安全に移動するには、本人が歩行訓練を受けることに加え歩行環境の整備と周囲の人々の援助が不可欠である。盲学校教育では、実体験を伴った適切な指導により言葉や概念を形成することの必要性が指摘されている。しかし、先天性視覚障害児の空間表現語理解の実態は十分明らかにされておらず、実態把握する方法やそれに基づく指導方法は存在しない。

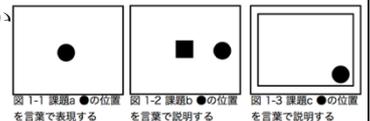
本研究では、先天性視覚障害児の空間表現語理解の特徴を明らかにすることを目的とした。空間の把握と移動における空間表現理解に関する基礎的知見を得るために、先天性視覚障害児は、手の届く範囲の空間において、自己と物や物と物との位置関係を言語的にどのように表現したり理解したりしているのか、個人が用いる空間参照枠に着目して検討した。あわせて、言語環境としての盲学校の現状も踏まえて、生まれながらに視覚を活用しない先天性視覚障害者と視覚を活用する晴眼者とのコミュニケーションについても考察した。

II 方法

1 **対象児**：先天性視覚障害児(以下、先天盲)と晴眼児を対象とした。先天盲は、盲学校に在籍し点字で学年相応の学習を進める児童11名と生徒8名であった。晴眼児は、関西圏の小学校に在籍する2年生25名、4年生19名、6年生19名であった。本研究は、学校長・保護者・本人等に研究目的と倫理的配慮の説明を行い、同意を得て行った。

2 **手続き**：先天盲の調査は歩行訓練士の養成を受けた盲学校教員が個別に行った。晴眼児の調査は各学級担任が学級ごとに行った。

3 **課題**：A4用紙に描かれた●の位置をどのように言うか言語で説明(記述)する課題a・b・cの3種(計11題)を行った。aは用紙の「中央・下・右・左上」に●が描かれていた。bは用紙の中央に■が描かれ、さらに用紙の「下・右・左上」に●が描かれていた。cはaと同様の位置に●が描かれ、さらに用紙の1cm内側に四角の枠が描かれていた。先天性視覚障害児用の刺激は図形等を触覚的に把握できるように立体コピー機で作成した。



4 **分析方法**：先天盲小学部・中学部、晴眼小2・小4・小6の5つに群分けし、表現された空間表現語と空間参照枠を集計して割合を求めた。空間参照枠は言語的に表出(記述)されたものを数えた。誤反応は課題で提示された位置に対して上下左右反転した誤りとした。分析は著者と特別支援教育専攻の大学院生2名の合計3名で行い整合性を確認した。

III 結果

1 **空間表現語**：晴眼児：一意の空間を特定しない表現を用いる場合があり(例：右を横とのみ表現)、その傾向は低学年で顕著であった。高学年ほど表現に多様性がみられ、特に「斜め」を使った表現が多くみられた(例：左上、左斜め上、斜め左上等)。先天盲：一意の空間を特定する表現が多く用いられ、「手前と向こう・奥」は先天盲でのみみられた。対象者の少なさなどから単純な断定はできないが、小学部と中学部で表現された空間表現語に違いがみられなかった。「斜め」を表現した者は少なかった。

2 **空間参照枠**：課題a：空間参照枠を表出した者は全体的に少なく、特に晴眼児の表出割合は小さかった。課題b・課題c：晴眼児は用紙に描かれた■や枠を空間参照枠として表出した者が多く、高学年ほど空間参照枠として表出した者の割合が大きかった。先天盲は、空間参照枠の表出そのものが少なく、■や枠ではなく、自分から見た位置関係を表出するなど自己中心参照枠を用いる場合があった。

表1 課題a4 表現された空間表現語数(人)

空間表現	先天盲小学部 (n=11)	先天盲中学部 (n=8)	晴眼小2 (n=25)	晴眼小4 (n=19)	晴眼小6 (n=19)
左上・左の上	7(63.6)	5(62.5)	16(64.0)	11(57.9)	13(68.4)
上横	0	0	2(8.0)	0	0
左向こう	2(18.2)	0	0	0	0
左奥	1(9.1)	2(25.0)	0	0	0
斜め上	0	0	2(8.0)	1(5.3)	0
斜め左上	0	0	3(15.8)	1(5.3)	0
左斜め上	1(9.1)	0	1(5.3)	3(15.8)	0
左上斜め	0	0	1(4.0)	0	1(5.3)
その他	0	0	3(12.0)	0	1(5.3)
無回答	0	0	0	1(5.3)	0
反転誤り	0	1(12.5)	1(4.0)	1(5.3)	0

表2 課題b1 表現された空間参照枠と数(人)

参照枠	先天盲小学部 (n=11)	先天盲中学部 (n=8)	晴眼小2 (n=25)	晴眼小4 (n=19)	晴眼小6 (n=19)
自己	0	1(12.5)	0	0	0
四角	2(18.2)	0	9(36.0)	14(73.7)	16(84.2)
用紙	1(9.1)	0	0	0	0

(1)内の数値は該当群内における割合を示す。晴眼小6の割合は小数第2位をまるめた結果合計100%とならない。その他の空間表現は小2・左奥・左斜め上・小6・左奥。

(2)内の数値は該当群内における割合を示す。

IV 考察

- 1 先天盲が多様な空間表現を獲得するための意図的な学習経験の必要性
- 2 視覚を活用する者と視覚を活用しない者のコミュニケーションを成立させるための相互理解の必要性
- 3 今後の展望：身体移動を伴う規模の空間における空間表現語と空間参照枠の活用に関する研究、視覚を活用する者と視覚を活用しない者とのより良いコミュニケーションを形成するための言語環境のあり方に関する研究